「~タリ(スル)」の意外性と配慮効果

依頼文脈における使用を中心に

大和啓子

キーワード: タリ、意外性、対人配慮、フェイス、依頼文脈

1. はじめに

本稿では、対人配慮を動機として選択されたと考えられる一つの言語表現として次のようなタリについて考察する。

(1) [休んだ授業の課題レポートを書くため友人に依頼する場面で] 参考文献を教えてもらえたりしたら嬉しいな¹

(1)では同じ状況で、タリを使わず「参考文献を教えてもらえたら嬉しいな」といっても 依頼の内容を変えることなく、依頼の発話として用いることができる。情報伝達上、不必 要なタリは、対人的な配慮から選択されたと考えられる。

日本語には、敬語や呼称のようにそれを用いると必ず他者との距離関係を表示できる対人関係表示専用形式がある。それらは、そのまま配慮の効果をもたらす表現装置となりうる(滝浦 2007)。しかし、そのような専用形式ではなくても、対人配慮をあらわすことのできる表現形式はある。

本稿では、本来「~タリ~タリ (スル)」の形で並列を示すタリが、対人配慮効果をもたらす一形式としてとらえる。そして、タリという形式のもつ意味からいかにして対人配慮効果があらわされうるのかということを考える。

2. 言語行動選択の動機としてのフェイス配慮

人がことばを交わす際には、自分が他者とその場においてどのような関係にあるか、あるいはどのような関係にしたいかを規定する意識的、無意識的な何らかの配慮が働いていると考える。そのような対人配慮を動機として、話者は、言語行動の様々なレベルにおいて、様々な選択を行っている。たとえば、どういう内容のことを言うか、あるいは言わないか、どのように相手の注意を引き、どのように話を組み立てていくか、そして、どのような言語表現を用い、どのような韻律で伝えるかなどである。

¹ 用例(1) は 2003 年筑波大学学生を対象に筆者が質問紙調査によって収集した、設定された依頼場面における記述発話データによる。以降の用例は web 上から採取した。出典 url は稿末に記す。

対人配慮の理論として Brown and Levinson (1987) のポライトネス理論がある。ポライトネス理論のキー概念であるフェイスは、もともとは Goffman (1967) によって提唱されたもので、人が他者と出会ったその時々に、他者との間に求める社会的な自己評価イメージであり、人々は互いにそれを保持しようとするものである。この Goffman のフェイスという概念を Brown and Levinson はネガティブフェイス (negative face) とポジティブフェイス (positive face) という人間誰もが持つ 2 つの欲求として捉えなおした。

ネガティブフェイスとは、自己の領域を邪魔されたくない、行動の自由を守りたいという欲求で、ポジティブフェイスとは、他者に受け入れられたい、認められたいという欲求である²。そしてこれらの欲求が、フェイス侵害行為(Face Threatening Act, FTA)によって満たされないときには、さまざまな方法によってそれを補償したり回避したりしてフェイスを保持しようとする。この人間誰もが持つという 2 種類のフェイス欲求への配慮が言語行動選択の普遍的な動機であるとするのが彼らのポライトネス理論である。

本稿では、タリもフェイス配慮という動機から選択使用されうるのではないかと考え、フェイス補償の方略の一つとなっていることを文脈、とくに依頼文脈との関連から明らかにする。

3. タリの意味・用法

本節では、タリの意味・用法について、森山(1995)を元に確認する。「~タリ~タリスル」という形で用いられる(2)のような用法がある。

(2) ホテルでは、散歩をしたり水泳をしたりしていました。

このように「タリ」には、複数の事態が並列的に並べられるという基本的な意味があるとして次のようにまとめている。

(3) タリの基本的意味:結合的並列

ただし、タリによって列挙される内容は、その要素だけですべて尽くされているわけではなく、まだほかのことがあったという可能性を残している一部列挙といえる。たとえば、ホテルで散歩や水泳やテニスをしていた場合でも次の(4)のように言うことができる。

- (4) ホテルでは、散歩をしたり水泳をしたりしていました。
- (5) ホテルでは、散歩をしたりしていました。

² たとえば、相手が言いたくない秘密について無理に根掘り葉掘りきくことは、相手の触れられたくない 欲求を侵害することになり、ネガティブフェイスを傷つけ、自慢話に対して、無関心な態度をとることは、 相手の認められたいという欲求を無視することになり、ポジティブフェイスを傷つける。

さらには(5)のようにひとつの要素だけでも一部列挙としてタリを使って表現することができる。しかしこの場合も(3)の基本的意味にあるように、必ず並列的な複数の事態を暗示しているとされる。

また、タリが一つの要素のみを取り上げる用法には、次の(6)のような並列的な同類集合の意味から、(7)のような質的意味を問題とする意味への転化が起こっているものもある。

- (6) きのうは、しんのすけにどなったりして、一日が過ぎた。
- (7) さっきは、しんのすけにどなったりして、悪い父親だ。

質的意味を問題にする用法とは、ある種の属性を問題とする文脈において、タリが持つ列挙的な意味をもとにしつつ、同類的なグループから一つの例を取り出すという例示的な表現方法をとることで、暗にその類的意味を取り上げるものである。(6)では、文字通りの一部列挙の意味での解釈が可能であるのに対し、(7)で、実際に問題になっているのは「どなった」ことそれだけである。しかし、同類項があるような表現タリを用いることで、質的に一般化することで、「悪い」という質的側面を強調することができるのである。

さらに、この質的意味の派生用法として、「冗談の「たりして」」という用法があること を指摘し、次のような例を挙げる。

- (8) [うどんを食べるときに、テーブルの上にマヨネーズがあるのをみて、冗談で、] うどんにマヨネーズをかけたりして(みたらおもしろい)。
- (8)は質的意味の一種、評価の言い方をベースとしていて、極端な異常事態を想定して楽しむ表現となる。また一部列挙ということから、それだけをまじめに考えていないということが含意できるとして、並列的な事態の結合というタリの基本的意味とも合致する。

このように森山(1995)はタリの多様な意味用法がいずれも、結合的関係で並列するということ、そして、一部列挙という意味を基本的に持つということから説明可能であると主張する。

しかしながら、本稿で問題とする(9)のタリは森山の説明だけでは分析できない。依頼という文脈で、参考文献を教えてもらうこと以外に、まだほかの可能性があることを示す一部列挙とは考えにくい。派生的用法とされる質的例示の(10)の用法は一見すると同じように見える。

(9) 参考文献を教えてもらえたりしたら嬉しいな。 ((1)再掲)

(10) しんのすけをどなったりして、悪い父親だ。 ((7)再掲)

しかし、(10)が「悪い」という質的側面を強調するのに対し、依頼の文脈で用いられる(9)

が問題とするのは、「嬉しい」という質的側面ではなく、「参考文献を教えてもらう」である。そのため、質的例示とも異なる。

4. ぼかし表現

タリが対人配慮との観点から取り上げられているものとしては、ぼかし表現の研究がある(村田 1994)。村田は、「話したり、書いたりする際に、聞き手や読み手との間に起こる摩擦はつらい」ものであるため、「相手にやさしく、自分にもやさしく、緊張度は低く、伝達はあいまいにつとめる」という動機から「言う態度をことばでぼかす方法」をとるぼかし表現が使われているとする。「ほう」「とか」「したりして」「みたい」「なる」「思われる」など例を挙げて示し、これらの表現は、「言うことで、限定や断定や個別性を回避」し、「他者との摩擦を避ける」効果があるとする。本稿で問題とするタリにかかわる表現である「したりして」は「ほう」「とか」とともに限定を避ける表現とされ、以下のような例をあげている。

- (11) 目前の料理を「ちょっとたべたりして」と言って味見をする
- (12) 外国語の単語がわからないとき「辞書をひいたりして」と言ってページをめくる
- (13) コーヒーとか飲みたい

(11)のような場合、実際に行う動作を限定して言いたくない気分で「たべる」と言わずに「たべたりして」が使われるとする。その際、「ためしにたべてみよう」という程度の気分をよそおいながらも「たべたいからたべる」という真意がそこにあるとする。しかし、「したりして」という形式が、なぜ、そのような気分を表すことができるのかについては言及されていない。

同じく限定を避けるとする「とか」については、(13)のような例を挙げ、複数のものを並立させるときに用いられ、そこに名前の挙がっていないものの存在を暗示させることから「これが全部ではない」という気分と結びつくとする。

村田の「とか」の分析は、森山の指摘するタリの一部列挙による同類暗示と共通するが、 3節の最後に示したように本稿で問題とするタリの用法の説明には十分ではない。また、タ リのためしに~してみようという気分の説明としても明らかでない。

また「とか」や「たりして」が同じように限定を避けるとしても、形式が異なれば、その効果が得られる仕組みは異なると思われる。その仕組みを細かく明らかにすることは、日本語では、どのような表現を使った時に、どのような側面に意識がむけられているかということを明らかにすることにもつながると考えられる。

以下、タリの対人配慮効果がタリのどのような用法から、どのようにして得られるのか ということについて考察する。次の 5 節で森山の指摘以外に、タリにさらなる用法がある ことを確認し、6 節で用法からあらわされる配慮効果について述べる。

5. 有標の事態を示すタリの意外性

一つの要素のみを取り上げるタリには、類的なものを暗示する質的例示の用法があると されたが、それ以外に、対称的なものを暗示する用法もある。その際タリでとりあげられ る要素は文脈とのかかわりで制限される。作例を示し説明する。

- (14) 花子は(その時々で)玉子焼きがうまくつくれたりつくれなかったりする。
- (15) 料理の得意な花子は、玉子焼きがうまくつくれなかったりする。
- (16) 料理の苦手な花子は、玉子焼きがうまくつくれたりする。
- (17) ?料理の得意な花子は、玉子焼きがうまくつくれたりする。
- (18) ?料理の苦手な花子は、玉子焼きがうまくつくれなかったりする。 (作例)

(14)は玉子焼きがうまくできる場合もできない場合も同じようにおこりうることを示すと言える。しかし、一要素のみをタリで示す場合には、(15)、(16)のように文脈に照らして、可能性が低いと思われる事態を取り上げることが必要となる。一般に、花子は料理が得意だから玉子焼きくらい作れるだろう、あるいは、料理が苦手だから玉子焼きすらつくれないだろうというような想定が働くと考えられるが、そのような想定に照らして、生じる可能性の高い事態を(17)、(18)のようにタリを用いて示すことはできない。

言い換えれば、タリで取り上げられる事態が一要素のみであるとき、タリで示されるのは、想定通りの当り前の事態ではなく、話者の想定から外れた有標の事態であるといえる。 以下に実例を示す。

- (19) [新しいアルバムについてのインタビューの中で] 気楽にやったように聴こえる曲ほど、実は一生懸命だったりするんです。 (ケツメイシ)
- (20) [社会派小説を取材を進めつつ書く作家に対し、小説の筋を見失わないためにどうしているかという質問に対する答えの中で] 予定外の人が登場して話を転がしてしまうこともありますが、その人が意外に好評だったりすることもあるんです。 (作家)
- (21) [女優の人柄について] ああいう一見派手なのが案外中身は古風だったりするんです。 (陣内・紀香結婚)

(19)気楽にやったように聴こえるのに「一生懸命だったり」、(20)話がそれてしまうのに「好評だったり」、(21)見た目は派手なのに「古風だったり」のようにタリのついている

要素は、前文脈とは逆接でつながっていて、想定から外れた有標の事態であるといえる。 また、有標の事態がタリでマークされていると考えると、(22)~(24)に示すようにそれぞれ に対称的な無標の事態を想起することができる。

(22) 気楽にやったように聴こえる → 有標: 一生懸命やった 無標: 気楽にやった

(23) 小説の筋がわかりにくくなる → 有標:読者に好評 無標:読者に不評

(24) 見た目が派手 → 有標:中身は古風 無標:中身も派手

(22)~(24)が「実は」「意外に」「案外」、など想定外の事実を示す要素と共起することからも明らかなように無標の事態に対する有標の事態がタリによって示される。言い換えれば、通常の状態とは違う、意外な状態がタリによってあらわされるといえる³。

以上、タリは有標な事態をとりあげ、「意外性」を示すことを明らかにした。

6. 依頼文脈でのタリ

6.1 有標の事態であるように見せる

5 節では、複数の事態を並列的に結合するというタリの基本的な意味から、派生的に有標の事態をタリによって明示し、対称的な無標の事態を暗示する用法が生じることを確認し、 そこから意外性が示されることを述べた。

ここから、本稿のはじめにあげた「参考文献教えてもらえたりしたら嬉しいな」のタリ の分析にはいる。

参考文献を教えてもらうように頼むという依頼の文脈(25)において、タリで取り上げられた事態以外に何らかの暗示される事態を想起することは難しい。依頼によって達成したいのは言及する事態そのものであって、想定外の事態でもない。また(26)(27)でも、タリを使わずともその依頼達成に必要な依頼内容の伝達にはなんら支障がない。

- (25) [休んだ授業の課題レポートを書くため友人に依頼する場面で] 参考文献を教えてもらえたりしたら嬉しいな ((1)再掲)
- (26) このフォントの名前を教えて下さい。似ているものでも OK です。 どこで入手可能かも教えていただけたりすると大変助かります。 よろしくお願いします! (フォント)

³ タリが意外性を示すと考えると、森山が「冗談のたりして」としてあげている例も同様に説明することができるだろう。うどんにマヨネーズはかけないという無標の事態に対して、これを有標の事態ととらえると、うどんにマヨネーズをかけることの意外性がタリによって示されているといえる。すなわち、複数の事態の一部列挙というタリの意味から、派生的に有標の事態をタリでマークし、無標の事態を暗示する用法を確認し、そこから意外性が示されるのである。森山が指摘するようにそれが極端な異常事態を示しているとすれば、その通常状態とのズレが大きくなり、したがってその意外性が明確になり、面白さを引き出すという冗談の手法としてタリが使われたとも考えられるだろう。

(27) [遊園地のアトラクションで水に濡れてしまった状況で] 出口のところで「ドライヤーかタオルを貸していただけたりしませんか…?」と 聞いてみた。 (遊園地)

このような文脈において、タリを用いることによって、無標の事態を、有標の事態のように示している。そして、(26)教えてもらうことや(27)貸してもらうことを、まるで意外なことであるかのように表現している。

依頼文脈で意外性を表すことが、対人配慮効果としてどのようにはたらくのだろうか。 潜在的な FTA である依頼について確認した後、意外性を示すことによる対人配慮の効果に ついて述べる。

6.2 依頼とフェイスの補償

依頼とは話し手の欲求が聞き手によって満たされることを求める行為であり、聞き手は 依頼を承諾することによって行動の自由が奪われ、自己の領域を侵されることになる。要 するに、聞き手のネガティブフェイスを侵害する行為である。ゆえに、どんな依頼であれ、 依頼という行為そのものが、潜在的に (potential) FTA であるとされる (Brown and Levinson 1987)。相手のフェイスを侵害しやすい依頼行為においては、侵害に対する補償、 軽減、あるいは回避などの方略がとられることが多くある。たとえば、「お財布をわすれち ゃって…」と状況だけを説明して、「お金を貸してほしい」などというような直接依頼を行 わずに直接的なフェイス侵害を避けたり、「本当に悪いんだけど」のような恐縮を伝えたり することでフェイス侵害を補償したりすることはよくある。また、依頼の当然性 (蒲谷他 1998) を言語表現上低めることもフェイスの補償となると考えられる。話し手が認識する 聞き手との立場・役割、恩恵等の関係から、当然性が高い場合には頼みやすく、当然性が 低い場合には頼みにくい依頼となる。日本語の依頼の一種の決まり文句「すみませんが・・・ していただけませんか」(熊谷 1995) は、当然性の高い依頼にも用いられていて、当然性を 言語表現上低くして、安易に頼んでいるわけではないことを示して、依頼のフェイス侵害 の軽減をしていると考えられる。タリの意外性も、「すみませんが・・・していただけませ んか」同様、表現上の依頼の当然性を表現上低くするものとして働くのではないだろうか。 次節で具体的にタリのフェイス配慮について述べる。

6.3 依頼におけるタリの意外性とフェイス配慮

依頼文脈において、タリを用いて無標の事態をまるで意外なことであるかのように示す ことが、フェイス配慮とどのように関係するのだろうか。

依頼は相手の領域を侵害しやすいという行為である。そのような依頼にタリを用いて意 外性を示すことで、相手が依頼を受け入れる可能性が低いと認識していることを示すこと ができる。たとえば、「教えてもらえたり…」ということは、「まさか教えてもらえるとは 思っていないが…」というように依頼を受け入れてもらうことを当たり前とは思っていな いことを示していることになる。そうすることによって、相手の行為の自由を奪うつもり が少ないことを言語上示し、相手の領域を守る、つまり、ネガティブフェイスに対しての 配慮をあらわすことができる。

また、逆にいえば、依頼が断られる可能性を認識していること、断られることをある程度覚悟していることを示すことにもなる。相手が依頼を断れば、依頼者のポジティブフェイスを傷つけることになる。しかし、あらかじめ、断られる覚悟があればそのフェイス侵害は少なくて済む。このようにして、相手が依頼を断る際の負担を減らすことは、依頼を受けるか断るかの選択により自由を与え、結局は相手のネガティブフェイスへの配慮にもつながるのである。

6.4 依頼文脈以外のタリの意外性

もちろん依頼文脈以外でもタリを用いて有標の事態であるかのように示し、意外性を表すタリを用いる場合がある。依頼以外というのは大変大雑把な括りであり、ほかの文脈ごとの違いもあると思われるが、ここでは、依頼以外にもタリの意外性が配慮効果として用いられうること、すなわち潜在的な FTA とはなりにくいような文脈でも対人配慮を動機としたタリが使用されること示すために一つだけ例を挙げたい。

(28) ちなみに今日は私の誕生日だったりします。プレゼントやメールをくれた方々、ど うも有り難うございます。(誕生日)

(28)では「今日は私の誕生日です」と無標の表現で述べずに、有標の「タリ」を用いて、さも意外なことのように示している。これによってどのような効果が生み出されているだろうか。

タリを用いることで、自分にとっては自明のことも相手にとっては当たり前のことでは ないと認識していることを示している。今日が誕生日であるという情報を押し付けがまし くならないように提示することになる。つまり、他者の領域を犯さないようにするという ネガティブフェイスに配慮している。また同時に、自身のポジティブフェイス配慮の効果 を含意しているともいえる。自分のポジティブフェイスに配慮するとはすなわち、あつか ましい人だと思われたくない、他者から認められたいという欲求を示すということである。

筆者の知人の20代前半~30代前半の女性数名(大学院生、研究員、主婦)に、本稿で挙げた例文(25)~(27)に対してどのような印象をうけるかという質問をしたところ、依頼文脈でのタリは「自分でも良く使う」し「丁寧な感じ」がするが、依頼文脈以外のタリ(28)については、「若い人が使いそう」で、「媚びている感じ」「ふざけている感じ」がするという回答を得た。このように文脈の違いでうける印象が変わるのはなぜだろうか。

依頼のような潜在的な FTA を含む行為であれば、聞き手も話し手が何らかの配慮をすることを期待しているため「丁寧な感じ」を受け取る。しかし、(28)の今日が自分の誕生日であるという事実は聞き手にとってなんらのフェイス侵害を起こすものではない。このように特にフェイス侵害の伴わない文脈では、聞き手は話し手の配慮を期待していない場合もありうる。そのようなときに配慮を示しても、その配慮は不要なもの、過剰なものと感じられ、そこから「媚びている感じ」などがでてくるのだろう。また、配慮としては受け取らず、自分自身の誕生日であることを意外性をこめて表現することで状況によっては冗談のようにとらえられ、そこから「ふざけている感じ」などがでてくるのかもしれない。

このことから、ある形式が本来使われるべき環境から外れる環境において使われたとき、 その形式の持つ意味と新たにおかれた環境から新たな効果が生み出されると考えられる。 またその効果は個々の文脈と表現形式の持つ意味によって、それぞれに決まってくる。

本節では、タリという形式が不必要と思われる発話において、あえて用いることで有標の事態のようにして意外性を示すということは同じでも、依頼の文脈とそうではない文脈においては、異なる配慮効果がみられることがわかった。

7. 形式の意味と文脈と配慮

タリの例が示すように、文脈と形式の持つ意味内容との相互関係によって配慮効果が生み出されているということがいえるだろう。つまり、タリという形式そのものが配慮という効果を直接持っているのではなく、その文脈において、タリの意味と、とりあげる事態との関係からそれぞれに発話効果が生み出されるということである。滝浦(2007)は「ポライトネスは語や表現の「意味」そのものではなく、文脈や人間関係との相関によって生じる含み」として対人関係専用の呼称について、それらが直接的に対人配慮を示すのではなく文脈や人間関係にかかわってその発話効果が変わってくることを指摘しているが、タリのような対人関係非専用形式においても、適用されると考えられる。

本稿では、タリの持つ基本的意味から派生的に示された有標の事態を明示し無標の事態を暗示するという用法から意外性が表れることを示し、それを依頼文脈とそれ以外の文脈で拡張的に使用することによって、それぞれの対人配慮の効果が得られることを明らかにした。

8. おわりに

対人関係表現の非専用形式の一つであるタリのもつ意外性という側面が配慮効果を表すことを見た。日本語において対人関係表現の非専用形式を用いたとき、その形式のどのような要素 (e.g. 意外性) によって配慮をしているのかを明らかにすることによって、日本語による他者とのコミュニケーションにおいて、どんなことを気にかけているのかその配慮意識の実態を明らかにすることができるのではないだろうか。

ただし、配慮効果を含意するのはあくまで、話し手側の問題であって、聞き手の受け取

る発話効果が話し手の意図したものと常に一致しているとは限らない。実際、相手の領域に踏み込まないようにという配慮から、「です」、「ます」をつかって丁寧に話しているつもりが、逆に仲良くなりたくないのでは、とマイナスに受け取られる可能性もある。配慮の程度が相手の期待と一致した場合には、何事もなくコミュニケーションがすすむが、配慮の程度が期待と一致しない場合には、聞き手が不快感を覚える可能性がある。何事もなくコミュニケーションがすすんでいることが多いのは互いにちょうどいいバランスで配慮がなされているからであり、それは、配慮を生み出す形式の意味、文脈、人間関係のとらえ方に共通理解があるからこそである。それはまた、形式が配慮を示すために恣意的に使われているのではなく、一定のシステムのなかで使われていることの証だともいえるだろう。だからこそ、その共通理解が少なくなる異文化間接触では、互いの配慮のバランスが崩れ、ミスコミュニケーションや摩擦がおこってしまうのである。

最後に今後の課題をいくつか挙げておく。

本稿で扱ったタリの用法は、音声会話で多く見られるという印象がある。本稿の用例データはインターネットの掲示板、ブログに現れる会話部分、コメント欄、インタビュー記事などから採取した。いずれも、単なる出来事の記録とは違い、読み手を意識したはなしことばに近い記述がなされたものであると考えられる。しかし、言語表現上の対人的配慮を見る上で、実際の人間関係や状況を無視することはできない。今後は自然会話データを分析の対象として、言語形式と文脈に加え、話者の属性とのかかわりも考えながら、会話の相互行為の中で見られる配慮表現についてみていきたい。

また、誕生日の用例の「タリ」について「あつかましい人間だと思われたくない」など自己のフェイスへの配慮という側面があるとすれば、他者との間において、自分のイメージをどのように伝えるかという問題としてとらえることができる。定延(2006)で言われる「発話キャラクタ」が「自分はコミュニケーションのなかでこのようなものとしてふるまいたい」という「欲」の問題と関連しているならば、タリの自己のフェイスへの配慮による言語使用を発話キャラクタという観点から考えることができるかもしれない。これについても今後考えたい。

【用例出典】

(ケツメイシ) http://magazine.music.yahoo.co.jp/spt/20070829_001/interview_002

(作家) http://www1.e-hon.ne.jp/content/sp_0031_m_kouda.html

(紀香結婚) http://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/ga/guestion_detail/g1110353846

(誕生日) http://yotsuba.saiin.net/~kik/diary/d0507.htm

(フォント) http://q.hatena.ne.jp/1185250879

(遊園地) http://d.hatena.ne.jp/saolala/20070225

【参考文献】

蒲谷宏・川口義一・坂本惠(1998)『敬語表現』大修館書店

熊谷智子(1995)「依頼の仕方―国研岡崎調査のデータから―」『日本語学』14 -11 明治書院

定延利之(2006)「ことばと発話キャラクタ」『文学』7-6 岩波書店

滝浦真人(2007)「呼称のポライトネス―"人を呼ぶこと"の語用論」『言語』36-12 大修館書店村田美穂子(1994)「ぼかし表現の新方向」『国文学 解釈と鑑賞』59-7 至文堂

- 森山卓郎(1995)「並列述語構文考―「たり」「とか」「か」「なり」の意味・用法をめぐって―」 『複文の研究(上)』仁田義雄編 くろしお出版
- Brown, P., & Levinson, S.C. (1987) Politeness: Some Universals in Language Usage
 Cambridge: Cambridge University Press
- Goffman, E (1967) Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behavior, Garolen City, NewYork: Anchor: Doubleday (広瀬英彦・安江孝司訳(1986)『儀礼としての相互行為一対面行動の社会学ー』法政大学出版局)